

コケにしか見えないキノコ？！

2021.2.12 自然解説員 神谷耀生

夜はまだまださむいですが、昼間はやわらかな日の光がさしこみ、あたたかい日も増えてきましたね。長い冬が終わりに近づくとウメの花が咲いて、じきにサクラの季節がやってきます。

お花見ついでにウメやサクラの木をよく見てみましょう。みきやえだにびっしりと「コケ」が生えていることがありますよね。でもその「コケ」の正体、じつはキノコかもしれません。



こちらが本家本元、コケ植物



ようじょうちい

こちらは葉状地衣。
ウメノキゴケのなかま



じゅうじょうちい

これは樹枝状地衣。ハナゴケのなかま



かじょうちい

杯状地衣。モジゴケのなかま

地衣類(ちいるい)とよばれるキノコの仲間は、見た目はコケそっくりですが、れっきとしたキノコの仲間です。キノコと言えばシイタケやシメジ、エリンギやマツタケなど、いかにもキノコらしい、雨傘(あまがさ)のようなすがたを思いうかべる人が多いと思います。

あの雨傘は子実体(しじつたい)といって、ふだんは土の下やくさった木の中で、菌糸(きんし)とよばれる、細い糸のような目立たないすがたでくらしているキノコが、孢子(ほうし)とよばれる粉をまきちらすためとくべつに作り出した期間限定のタワーなのです。孢子は花粉とも種ともちがうものですが、まきちらされて土やくさった木にくっつくところから新たなキノコが育ちます。

地衣類もほかのキノコたちと同じように子器^{しき}とよばれるおわんのような形のタワーを作って孢子を飛ばしますが、ほかのキノコとちがって、孢子を作っていない時期でもコケのようなすがたで目立つところに生えています。それはなぜなのでしょう。

地衣類は、藻類(そうるい)とよばれる植物を身体の中に取り込むことで、太陽の光を浴びて光合成^{こうごうせい}をおこなってエネルギーを得ています。藻類を取り込むために、地衣類は菌糸をより集めてシートを作り、大きくじょうぶな身体になりました。藻類はふつう、海や川や池など水の中でしかくらすことができませんが、キノコのシートにはさまれることで、かわいた陸上へ進出できたのです。キノコと藻類がタッグを組んで、それぞれの得意分野^{とくいぶんや}を活かしてお互いにメリットをあたえながらかつやくしている、というわけです。

地衣類という言葉そのものを聞いたことのある人は少ないかと思いますが、身近なところだと、理科の実験に使うリトマス紙の原料にヨーロッパのリトマスゴケという地衣類

が使われています。それ以外にもイワタケという地衣類は埼玉県の一部などで食用になっています。

何度も言うように地衣類の見た目はコケ植物そっくりですし、実際に「ウメノキゴケ」「ハナゴケ」などとまるでコケのような名前を付けられた地衣類もあります。キノコなのに！

植物が草や木やつるなどに分けられるように、地衣類も葉っぱのように広がる葉状地衣(ようじょうちい)、木のえだのようにのびる樹枝状地衣(じゅしじょうちい)、かさぶたのようにはりつく痂状地衣(かじょうちい)の3つのタイプに分けることができます。

木のほかにも、土のかけやコンクリートの壁^{かべ}、石をつんで作った石がきなどの表面を探せば、さまざまな地衣類に出会えます。空気のごれには弱い生き物なので、さまざまな地衣類がたくさん生えている場所は空気がきれいな場所であるとも言えるでしょう。

いままで気にしたことがなかった人も多いと思いますが、今度から「コケ」を見かけたら、ほんとうにコケ植物なのか、それとも光合成をする変わり者のキノコなのか……足を止めてじっと見つめてみてはいかがでしょうか。身近な地衣類を集めたハンドサイズの図鑑も出ていますよ！